

辺野古通信

第23号 2011年5月11日



シュワブの浜に完成したフェンス 4/28 (RIMPEACE のHP から)

発行 沖縄の自立解放闘争に連帯し、反安保を闘う連続講座
沖縄講座 HP <http://www7b.biglobe.ne.jp/~okinawa-koza/>

日米首脳会談の「手土産」？ 新たな「沖縄処分」を許すな！

■「未曾有の被害をもたらした東日本大震災で、言いたいことが言えない雰囲気がある。しかし、今こそ沖縄の基地問題を語りたい」—4.26 横浜集会で、自らも被災地支援に入ったばかりの沖縄平和運動センターの山城博治さんは「基地と原発問題には共通性がある。どちらも根を絶たないと解決しない」と力強く訴えた。(2・3 頁参照) ■日米安全保障協議委員会(2 プラス 2)を間近に控えて慌しい動きが続いている。4月27日に米上院軍事委員会のレビン委員長とウェッブ委員が仲井真知事と面談、5月連休中に岡田幹事長、北沢防衛相が相次いで訪沖した。同時期、訪米中の下地幹男議員と面会したシファー国防次官補代理とキャンベル国務次官補は、「普天間とグアムがリンクしている」ことを指摘し「普天間の固定化のリスク」を強調した。沖縄へのあからさまな恫喝だ。6月下旬にも予定される菅総理訪米の「手土産」とすべく高江・辺野古の既成事実を積み上げ、日米首脳会談での「決着」を目指す両政府だが、米議会の中にも辺野古移設を困難視する声が広がり始めているという報道もある。 ■そんな時に、情報公開サイト・ウィキリークスで普天間を巡る日米交渉の舞台裏が暴露された。「最低でも県外」を公約した当時の鳩山首相が沖縄の声に耳を傾けているかのように振舞っていたころ、外務・防衛官僚や民主党幹部が米政府当局

者に辺野古移設案推進を伝え、アドバイスさえしていたという驚くべき内容だ。例えば長島昭久防衛政務官(当時)は鳩山首相就任直後の09年10月にキャンベル国務次官補に「北沢防衛相は辺野古案を支持している」と伝え、高見沢防衛政策局長は「政権が喜ぶような柔軟姿勢をあまり早期に見せるべきでない」とアドバイス。12月には山岡賢次国対委員長(当時)が米大使館担当者に「沖縄の政治は反対の為の反対」と伝え、翌年1月の名護市長選直後には松野頼久官房副長官は「県外模索は形の上だけ」「安保は一地域の政治に左右されない」と語った、等々。さらに自公政権時代、グアム移転経費を巡って日本側の負担を少なく見せかけるために必要もない軍用道路建設費10億ドルを再編費用に水増しして盛り込み、また「海兵隊8000人と家族9000人」というグアム移転人数も「日本向けに最大化した」ことも暴露された。これらは、歴代日本政府が沖縄をどのように扱ってきたか、「対米交渉」など見せ掛けに過ぎないことを示している。 ■日米両政府が押し付け続ける軍事植民地状況からの脱却—自己決定権の確立を求める沖縄の人々の闘いを誰も押し止めることはできない。新たな「沖縄処分」を許すな！

■辺野古・高江カンパは累計 1,204,145 円(5月11日現在)。引き続きカンパを！
郵振 00210-0-2021 沖縄連続講座

沖縄・靖国訴訟からみた「復帰」39年

- ◆日 時 6月4日(土)15時15分
- ◆会 場 大和市生涯学習センター207 大会議室
- ◇基地撤去をめざす県央共闘会議第12回定期総会・記念講演
お話 「沖縄・靖国訴訟からみた「復帰」39年
*金城実さん(彫刻家)



「痛みを地方に押しつける構造は、基地も原発も同じ」

4.26 横浜集会・報告

4.26 横浜集会は、高江の米軍ヘリパッド建設問題を一人でも多くの方に知ってもらおうと企画されました。「4月26日」は25年前にチェルノブイリ原発事故が起こった日。東北の被災地支援から帰ったばかりの沖縄平和運動センター・山城博治さんのお話と福島に放射能検知器を持って現地調査した神奈川高教組の小島浩介さんの特別報告を受け、沖縄の基地問題と原発問題の共通性について改めて考える機会となりました。参加者は約50人。集会に後援・賛同・協力いただいた自治労横浜本部や各支部、基地撤去をめざす県央共闘会議、多くの個人のみなさんにこの場を借りて感謝したいと思います。ありがとうございました。

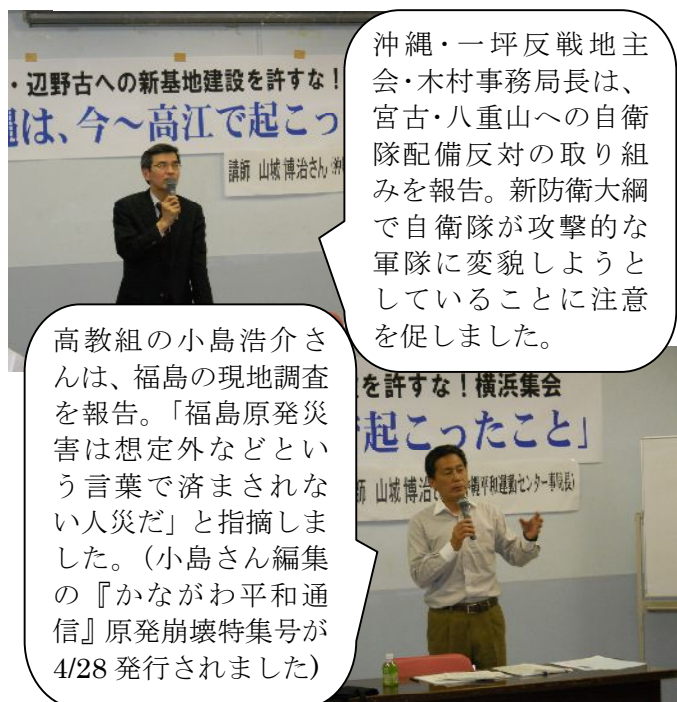
◆ ◆ ◆
集会冒頭は高江のビデオ上映。最初はヘリパッドいらない高江住民の会事務局の高橋昌弘さんのビデオメッセージ。これは沖縄講座のメンバーが4月8日に高江を訪問したときに収録させていただいた映像です。沖縄防衛局との激しい攻防の様子と、やんばるの静かな森を破壊する米軍ヘリパッド建設への怒り、平和な森に人殺しのための基地を作らせたくないという強い思いが、高橋さんの静かな語り口の中に込められていました。(残念ながら会場の音声機器の不具合があり、収録したメンバーが補足説明。参加者のみなさんにはお詫びします)。次に、住民の会事務局長の比嘉真人さんが撮影・編集された昨年12月から3月上旬までの高江現地の映像を上映。(高橋さん、比嘉さんのご協力に感謝します。)沖縄防衛局の職員を執拗に追求し、作業員を粘り強く説得する住民の会と支援者の徹底した非暴力抵抗闘争は、6月にも予定される菅総理訪米の手土産にと目論む政府・防衛省の、住民の声よりも米国のご機嫌伺いばかりの醜い意図を挫きつつあります。

◆ ◆ ◆
山城さんのお話も高江の状況から。「少なくとも工事は予定通りには進ませなかった。3月から6月まではやんばるの希少動物の産卵期に当たるということで工事の動きは今のところない。しかし、7月からは2月に倍する防衛局職員と作業員を動員して工事を強行し



てくることが予想される。住民の会の闘いへの支援と連帯を！」と山城さんは訴えました。また東日本大震災への被災地支援で見た、目を覆うばかりの惨状に触れ、「沖縄の問題も基地の問題も触れてはいけないような雰囲気がある。しかし、痛みが地方に押し付けられる構造は、基地も原発も同じ」と指摘し、「基地も原発も根を絶たないと解決しない。今だからこそ沖縄基地問題を語るべき。思いやり予算も辺野古新基地建設費用の1兆円も震災復興支援に充てるべき」と強調しました。

◆ ◆ ◆
若干の質疑の後、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロックの木村事務局長から連帯アピール、小島浩介さんから特別報告「福島原発で何が起こったか」を受け、閉会。交流会にも約20人が参加し、山城さん、小島さん、木村さんも含めて意見交換しました。



沖縄・一坪反戦地主会・木村事務局長は、宮古・八重山への自衛隊配備反対の取り組みを報告。新防衛大綱で自衛隊が攻撃的な軍隊に変貌しようとしていることに注意を促しました。

高教組の小島浩介さんは、福島の現地調査を報告。「福島原発災害は想定外などという言葉で済まされない人災だ」と指摘しました。(小島さん編集の『かながわ平和通信』原発崩壊特集号が4/28発行されました)



企業や資本、労働力が集中する大都市を守り、維持するために、米軍基地と原発が地方に張り巡らされている。言うべきことを言わないと、世の中は変わらない。

山城博治さんの講演要旨

「12月22日の未明、高江で今年の工事が始まった」というニュースが流れた。22日夜に車に米・味噌・しょうゆなどを詰め込み、すぐ高江に向かった。翌23日の夜7時ころ、米軍ヘリがいきなり飛んできて車の上でホバリングを始めた。車が倒れるくらいにゆれて座込みテントが壊れた。防衛局長交渉2回、現地での交渉1回やったが、埒が明かない。結局、米軍はやっていない、通常訓練で飛んだだけ、と。通常訓練であんなことが起こるといことはこれからも起きる。とんでもない。こんなやり取りをしている時に工事に入った。結局、ホバリング事件は闇に葬られた。

北部訓練場は那覇市がいくつも入るくらいの広大な演習場。96年SACO合意で北部訓練場の国頭村分は返還しましょう、となった。みんな喜んだが7箇所へのりパッドを南部の東村に移しますという普天間と同じ条件付。辺野古の新基地からヘリが飛んできて高江で訓練する。現在はCH46とCH53というヘリだが、2012年に最新鋭ヘリに更新される。アメリカでも墜落事故が頻発しているオスプレイという恐ろしいヘリが高江の集落のそばで訓練する。

1月18日から2月28日まで毎日防衛局の職員を動員して工事を強行してきた。N4ゲートでは既存のヘリポートを拡張し、琉球松を伐採した。N1ゲートは反対派を阻止する為のゲートがあり、ダンプで資材を搬入できないので土嚢を投げ入れる作業を始めた。それを阻止した。進入路も200メートルしかできていない。

7月から工事を再開する。これを阻止するには人が必要。高江は辺野古からも1時間以上かかり那覇から日帰りでは来るのが難しい。高江の闘いは2007年から始まったが、村長も区長も反対を言わない中で、厳しい闘い。県知事も名護市長も反対と言っている辺野古と違う。5世帯10数名で住民の会を作って、厳しい中で挫けないで建設反対を言い続けている。代表2名は妨害禁止の仮処分決定を受け、「仮処分は不当」と本訴に持ち込んでいる。菅総理が6月に訪米する予定で、その手土産で高江の工事を強行したという話がある。こんな政権は何なんだ。有権者の期待を政治家が裏切ってはいけない。高江は世界の希少動物の宝庫で、産卵期ということで工事は止まっているが、7月からは作業員を200人、300人、ダンプを20台、30台連ねてくる可能性もある。



辺野古はSACO合意から15年になる。15年経って作れないのに、まだ作るというのか。海兵隊はそもそも必要なのか。そういう議論も出ている。沖縄では「沖縄のために基地が必要」なんて誰も信じない。しかし本土では宣伝が行き届いていて、沖縄の基地がなければ日本の安全が守れないという理屈が通用している。今回の大震災でも沖縄の海兵隊が被災地に行ってパフォーマンスした。やはり海兵隊必要だろう、と。3月31日には思いやり予算1881億円の現行水準を5年間維持する法案が可決された。沖縄では「思いやり予算」を震災復興に回すべきではないかという声強い。米軍が原発80km圏外から被災地支援するよりも、その方が被災地のためになる。こういう無駄な金をそのままにしておいて増税はない。

私たちは自分の腸に怒りを溜めないで、どこかで吐き出さなければいけない。震災の支援に米軍や自衛隊が出動し、軍隊反対といいにくい雰囲気があるが、言うべきことは言わないと世の中は変わらない。震災の現場は、本当に悲惨。人が住めない様なことをして、みんな怒ってる。東電も原発も許さん、と。

沖国大でヘリが墜落したときに、事故現場周辺を米軍が囲い込み中に入れなかった。国は、住民の安全ではなく、米軍と共に軍事機密を守ろうとした。いま福島で起きている状況は同じではないか。20キロ圏内は死体も放置されている。米軍がいたら沖縄が守られる？「うそ言うな！」だ。いざミサイルが飛んできて阿鼻叫喚の地獄になったら、国家なんて住民のことを考えない。東京や神奈川の大都会は企業や資本、労働力が集中している。それを守り維持するために米軍基地と原発が張り巡らされている。臭いものは全部地方。1960年の安保改定するとき、本土の米軍基地は沖縄に行った。その後、基地は沖縄に集中し、本土の地方には原発がいっぱいできた。これがこの国の成り立ち。このことをよしとしている限り、地方は生きていけない。そういう国のあり方おかしい。

なぜ沖縄の人が基地問題に熱心なのか。原発を抱えている地域の住民が原発から逃れられないように、沖縄は基地から逃れられない。だから高江も辺野古もがんばる。私たちに人間らしい生活を返せというのが根本です。

(編集部責任で要旨をまとめました)

恋人のように！！「東アジア」へ ―〈併合40-1〉琉球群島から、今、呼びかける

2011年 4月9日(土)
13:30～17:30 (開場13時)
沖縄県立博物館・3階 美術館講堂
那覇市おもろまち3-1-1
入場無料・資料代 500円

● 基調講演：13:45～

川満 信一「異場の思想と東アジア越境憲法」

● パネルディスカッション：15:00～

パネリスト：

板垣 雄三 (東京大学名誉教授)

平良 識子 (琉球弧の先住民協会)

崔 真碩 チェ・ジンソク (広島大学教員)

山城 博治 (沖縄平和運動センター事務局長)

コーディネーター：

仲里 効 (映像批評家)



川満信一氏プロフィール

詩人、元「新沖縄文学」編集長。
著書に『沖縄・板からの問い』(泰流社)、
『沖縄・自立と共生の思想』(海風社)、
『ザ・クロス 21世紀への予感 川満信一
対談』『宮古歴史物語』(沖縄タイムス社)、
『沖縄発―復興運動から40年』(情況新書)、
個人誌『カオスの歌』(朗吟舎)主宰。

4月9日、沖縄県立美術館で「恋人のように！！「東アジア」へ」というシンポジウムがあり、約200人のホールがほぼ満席。川満信一さんの新著『沖縄発―復興運動から40年』(情況新書)の出版を記念する催しで、沖縄講座でお馴染みのパネリストがずらりと並ぶ。長時間にわたる討論の記録は別途発表されると思いますが、以下は、走り書きメモ。

◆ ◆ ◆
□冒頭は川満さんの「異場の思想と東アジア越境憲法」と題する基調講演。「異場の思想」には、どのような歴史的な背景があり、どのような歴史的な体験を踏まえて生まれたのか。「異場の思想」が、「琉球共和社会憲法」(1981年)に結実し、さらに「東アジアの越境憲法」に接続されていく、その歴史的な背景と根拠について、約1時間。「民衆が行為で示している相互扶助の精神に、未来への希望を見出し、『ジャスミン革命』へ繋ぐ夢を追っている。」「国家権力はサトウキビ・カッターのように非情なシステム。知恵と諧謔、柔軟さと忍耐、射程距離を用いた用心深さで、解体を進め、新たなシステムへと造り替えていくことが大切」と結んだ。

第2部は仲里効さん司会で進行した。

□アラブ研究の第一人者である板垣雄三さん：「きょうの会議のお誘いがあったときに、すぐさま「行きます」と返事した。中東で起きていること、大震災と原発事故という事態を組み合わせて考えるとすれば、沖縄でしかありえないと考えた。」「イスラームのタウヒード、

『多即一』という精神が一番歴史的に身につけている社会が琉球社会。たえず特殊扱いされている所こそ、最も普遍性を発揮できる。欧米中心主義からアジアへ、ということを経験から展開された川満さんは、中東的な人。基調講演は、中東革命を予知することを川満さんがやってこられたことの証明ではないか」

□琉球弧の先住民の会の平良識子さん：「自分のアイデンティティを考えるきっかけは、高校一年の95年。代理署名拒否裁判で日本国総理大臣が沖縄県知事を訴えるということが起き、友人たちと沖縄の政治について、日本について話し合った。その時に肌感覚としてあったのが、沖縄の基地を外に出したい、という強い思い、「沖縄の政治を変えていく運動を進めていく必要がある。人民の自己決定権の「回復」から「行使」していく方向への運動の転換を考えたい。」

□広島大学の崔真碩さん：「沖縄は一番近い他者。沖縄戦の5年後の朝鮮戦争で嘉手納基地からB29が北朝鮮を焼く野原にした。B29を通じて朝鮮半島と沖縄は繋がっていた。この悲劇をどう断ち切るかが、私にとってライフワーク」「東アジアと言う時に、冷戦の向こう側が入っていない。冷戦の向こう側まで想像できなければ、冷戦のこちら側にいる私たちがそのままいいということになる。アメリカにとって都合のいい東アジア観だけを持たされる。」

□平和運動センターの山城博治さん：「若いころ復興運動に動員され、先生たちと平和行進に参加し、69年返還協定、70年安保、72年復帰を迎え、音を立てて崩れていく沖縄の現状を肌身で感じた。その中で川満信一さんの論考を一生懸命読み、私たちが立って抛る思想はここ以外にないと考えた。」「沖縄の異質性を見つめ、私たちが差別し続けてきた『琉球人』などの言葉を逆に捉えて、私たちが足元から掬っていく国家に対峙しようという提起と受け止めた」「反復帰りの思想は、力を持ちうるか。マグマが爆発するような力で表現しうるのか問われている」「文化思想からグローバルな自立論の展開、アジアとの物的交流を通じてこの地域の平和を確立し、基地や軍隊に頼らない、嘘っぱちの抑止力にだまされない平和で豊かな地域づくりを進めたい」

◆ ◆ ◆
□最後に仲里さんが「沖縄の保守・革新の対立構造＝1968年体制が変容し解体されつつある。山城さん平良さんは、実際の政治と大衆運動の現場の中で、そのことを実践しているのでは」と指摘、「川満さんの琉球共和社会憲法が、東アジアの文脈で注目されている」と中国の孫歌さん等の論考を紹介し、締めくくった。